

氏名 森田 恵子 (モリタ ケイコ)  
本籍 埼玉県  
学位の種類 博士 (老年学)  
学位の番号 博甲第 80 号  
学位授与の日付 2017 年 9 月 4 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
学位論文題目 高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションの研究

論文審査委員 (主査) 桜美林大学教授 渡辺 修一郎  
(副査) 桜美林大学教授 芳賀 博  
桜美林大学教授 長田 久雄  
愛知淑徳大学教授 安藤 富士子

## 論文審査報告書

### 論文目次

I	緒言	1-2
II	加齢性難聴・看護学分野における患者とのコミュニケーションの先行研究とその問題	
1.	加齢性難聴に関する先行研究	3-4
2.	看護学分野における患者とのコミュニケーションの先行研究	4-6
3.	先行研究の問題	6
III	本研究の目的・意義と研究の全体構成	
1.	研究の意義と目的	7

2. 研究の全体構成	7
IV 研究 1 「高齢難聴患者が看護師に期待するコミュニケーション」	8-19
V 研究 2 「看護師による高齢難聴患者とのコミュニケーションの課題」	
1. 目的と意義	20
2. 研究 2 の構成	20
3. 研究 2-1 「看護師による高齢患者の聴覚評価の課題」	
.....	20-28
図表	29-32
4. 研究 2-2 「看護師の高齢難聴患者とのコミュニケーションの実践上の課題」	
1) 目的と意義	33
2) 対象	33
3) 方法	33-35
4) 結果	36-38
5) 考察	38-41
図表	42-48
VI 総合考察	
1. 研究全体のまとめ	49-54
2. 本研究の新規性	54
3. 本研究の限界と課題	54-55
謝辞	56
引用文献	57-62
資料	資料No.1-19

## 論 文 要 旨

人々の生活に障害を引き起こす世界共通の病態である難聴は、加齢に伴い有病率が上昇し、日本における 65 歳以上の高齢難聴者は約 1,500 万人と推計されている。治療や療養の場における高齢難聴患者は、複雑な環境や状況におかれ、看護師とのコミュニケーションにおいて困難を抱えていることが推察されている。

本研究は、高齢難聴患者および看護師の両面の立場から医療現場でのコミュニケーションの現状と課題を明らかにし、高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションの関連要因

を多面的に解明することを目的とする。論文を構成する一連の研究を通じて、高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションのあり方、看護師による高齢患者の聴覚機能評価のあり方の分析・考察を行い、高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションの乖離を解消し、高齢難聴患者の医療満足度と高齢者看護の質を向上させるための提言を行った。

研究1では、高齢入院患者23名（平均年齢81.5歳）に聴力検査及びインタビュー調査を行い、正常聴力群、難聴群各々の看護師に期待するコミュニケーションの特性をKJ法により分析した。難聴高齢患者は、病床という非日常的な環境に置かれ、看護師に対し、とくに「氏名」、「褒め」や「自分への関心の明瞭さ」など自己への関心を感じられるコミュニケーションを期待していた。また、触れるなどの非言語的コミュニケーションを交えたコミュニケーションを望んでいた。さらに、「途中で確認できる会話がよい」など、高齢難聴患者が適応的ストラテジーを行えるよう途中で確認できる会話を期待していること等を明らかにした。

研究2-1では、高齢入院患者188件（平均年齢81.1歳）のカルテを分析し、看護師による高齢患者の聴覚機能評価の現状と課題を検討した。看護師は経験的に聴覚機能を評価していることが多く、看護記録用紙の聴覚情報の項目では、高齢難聴患者の主観的な情報、看護師の観察や測定から得られる客観的な情報がとくに不足していることを示し、客観的な聴覚機能評価のために、指こすり検査のような簡便なスクリーニングテストを導入することなどを提唱した。

研究2-2では、看護師側からとらえた高齢難聴患者とのコミュニケーションの困難さと実践されているコミュニケーションの課題を明らかにすることを目的として、高齢者の急性期治療を行う病院に勤務する看護師356名を対象に、自記式無記名の質問紙による留置き調査を実施した。回答のあった339名中、回答項目に欠損値のない240名のデータを分析に用いた。看護師は、高齢難聴患者の看護業務の種別に関わらず約8割が困難を経験しており、多様なコミュニケーションの方法を組み合せて対応していることを示した。しかし、コミュニケーション方法として、難聴者との会話で有効とされる、普通またはやや大きめの声で、ゆっくり、はっきりと発音する方法ではなく、現在推奨されていない「低い声」や「大声」での会話を採用していることがあること、筆談やジェスチャーはよく活用しているが、研究1で明らかになった、高齢難聴患者が期待している注意喚起と安心感をもたらす身体接触の関わりは少ないことなどを明らかにした。さらに、臨床経験10年以上の看護師は、10年未満の看護師と比較し、高齢難聴患者と積極的に関わることができることも示し、高齢難聴患者とのコミュニケーションの方法について、経験年数の異なる看護師同士での演習などにより相互に学び合う機会を設けることなどの重要性を示した。

## 論文審査要旨

本研究の目的は、高齢難聴患者および看護師の両面の立場から医療現場でのコミュニケーションの問題点とその関連要因を多面的に解明することである。研究1では高齢入院患

者 23 名への聴力検査及びインタビュー調査から、正常聴力群、難聴群各々の看護師に期待するコミュニケーションの特性を KJ 法により分析し、難聴群はとくに、自己への関心を感じられるコミュニケーション、非言語的コミュニケーションの強化、途中で確認できる会話を期待していること等を明らかにした。研究 2-1 では高齢入院患者 188 件のカルテより看護師による高齢患者の聴覚機能評価の現状と課題を分析し、聴覚機能評価が十分でないこと、看護師は聴覚機能の評価及びコミュニケーション機能の評価をもとに看護の方向性を経験的にアセスメントしていると考えられることを示し、聴覚機能評価のための項目の必要性を提言している。さらに研究 2-2 では高齢者の急性期治療を行う病院に勤務する看護師 240 名の留置き調査結果から、高齢難聴患者とのコミュニケーションの困難さと実践されているコミュニケーションの課題を検討し、看護師は、高齢難聴患者の看護業務の種別に関わらず約 8 割が困難を経験していること、コミュニケーション方法として、難聴者との会話で有効とされる、普通またはやや大きめの声で、ゆっくり、はっきりと発音する方法ではなく、大声を用いていることが多いこと、筆談やジェスチャーはよく活用しているが、注意喚起と安心感をもたらす身体接触の関わりは少ないとなど明らかにしている。これら一連の研究は、十分な国内外の先行研究の検討をもとに、適切な方法にて分析されており、研究の目的と意義、信頼性、独創性において博士論文として十分な水準にあるものと判断し、合格と判定した。

## 口頭審査要旨

公開試問では、30 分間の論文概要の発表後、30 分間にわたり質疑応答が行われた。本研究が想定する母集団、本研究の意義と新規性の確認、看護師の高齢難聴患者へ関わる姿勢を検討する意義、本研究成果の活用のあり方などについての質問がなされ、それについて的確な説明および考察がなされた。本研究では高齢難聴患者を母集団に想定していること、新規性として、高齢難聴患者が看護師に期待するコミュニケーションの特性を、正常群聴力群との対比により明確にしたこと、188 件の看護記録から看護師が行っている聴覚評価を詳細に分析し課題を明確にしたこと、看護師が高齢難聴患者に感じる看護上の問題や実践しているコミュニケーションの課題を明らかにしたことが評価された。

公開試問後の主査・副査による審査会では、研究の枠組み、先行研究のレビュー、目的と意義、新規性、研究方法、結果および考察、研究成果の活用のあり方など論文全体について精査され、いずれも博士論文として十分な水準にあるものと確認された。

高齢難聴患者および看護師の両面の立場から医療現場でのコミュニケーションの問題点とその関連要因を多面的に解明することを目的に行われた本研究の成果は、高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションの乖離を解消し、高齢難聴患者の臨床現場における満足度および高齢者看護の質の向上に資する貴重なものであり、博士論文として十分な水準にあるものと、主査および副査全員が合格と判定した。